

NPO法人 龍ヶ崎ゲヴァントハウス

## 秋の特別講演会 ～金子建志氏を迎えて～

# “日本におけるブルックナー受容”

## —改訂・版の問題を中心に—

今回、NPO法人 龍ヶ崎ゲヴァントハウスでは、2023年秋の特別企画として、昨年春の講演会で大好評を得ました音楽評論家・音楽学者・指揮者として著名な金子建志氏を再びお迎えし、今年生誕200年に当たるブルックナーにスポットをあて「“日本におけるブルックナー受容” —改訂・版の問題を中心に—」と題して特別講演会を行います。

金子氏はこれまで、「レコード芸術」誌の交響曲部門の新譜月評を担当、2022年度の「第60回レコード・アカデミー賞」では選定委員長という重責をこなされました。また、古いエアチェック・ファンであればNHK・FMの「海外クラシックコンサート」、「ベスト・オブ・クラシック」や、N響定期演奏会生中継での名解説でおなじみの存在です。

ブルックナーのスペシャリスト、金子先生によるお話は、ブルックナーイヤーにふさわしい貴重な場になると思います。



日 時：2023年10月12日(土) 午後2時00分～午後4時30分(休憩15分)

場 所：龍ヶ崎市 市民活動センター 2階大会議室

講 師：金子建志氏(音楽評論家・音楽学者・指揮者)

テーマ：“日本におけるブルックナー受容” —改訂・版の問題を中心に—

### 《金子建志氏・略歴》

1948年千葉県生まれ。1966年東京芸術大学音楽学部楽理科入学。在学中、音楽理論を柴田南雄に師事し、指揮法を渡邊暁雄や高階正光に師事。1970年3月、同大卒業。この後、指揮法を齋藤秀雄に師事。1985年、千葉フィルハーモニー管弦楽団結成。同楽団の常任指揮者として活動する他、市川交響楽団や世田谷交響楽団、19世紀オーケストラ、アンサンブル花火などの指揮者としてアマチュアオーケストラ活動にも関与。

『音楽現代』、『レコード芸術』、『朝日新聞』の新譜月評を担当。NHK-FMの「海外クラシックコンサート」や「ベスト・オブ・クラシック」、ミュージックバードのクラシック音楽番組で解説を担当。2022年度「第60回レコード・アカデミー賞選定委員長(交響曲部門選定委員)」。常葉学園短期大学音楽科教授。武蔵野音楽大学非常勤講師。著書に「ブルックナーの交響曲：こだわり派のための名曲徹底分析」(音楽之友社)、「マーラーの交響曲：こだわり派のための名曲徹底分析」(音楽之友社)、ベートーヴェンの第九：こだわり派のための名曲徹底分析」(音楽之友社)、「200CDオーケストラの秘密：スコアが見えるディスク・ガイド」(立風書房)他多数。

### 〰️ 講演内容 (休憩15分) 〰️

ベートーヴェン以後の最も重要な交響曲作曲家のひとり、ブルックナーの交響曲作品には、同名曲でありながら、異なる版・稿と称した複数の楽譜が存在します。ブルックナー自身が作品完成後に様々な理由で改訂することも多くありましたが、出版の際に、弟子たちが売れるような作品として世に出したいという思いから、手を加えることもありました。戦前、国際ブルックナー協会が作品全集を編集する際に、責任者であったロベルト・ハースが校訂したのが「ハース版」で、ハースのあとを継いだレオポルト・ノヴァークがこれを洗い直し、再度編集し直したのが「ノヴァーク版」と呼ばれています。また、指揮者によってはどの版とも違う演奏が存在したり、ブルックナーの演奏形態は複雑さを極めています。ブルックナーの交響曲の「版」についてはいつも話題に上がりますが、これからも永遠に語り継がれて行くことでしょう。

金子先生による今回の聴き比べを是非お楽しみください。

(裏面に続く)

# “日本におけるブルックナー受容” —改訂・版の問題を中心に—

🌀 講演内容（休憩15分） 🌀

## 交響曲第8番ハ短調

第1稿1877年版 第1楽章フォルテシモで終わるコラール風コーダ部分

- ケント・ナガノ & バイエレン国立管弦楽団
- オルガンによる同一箇所による演奏

### 【指揮者によりアレンジされた演奏】

## 交響曲第8番ハ短調

第2稿1890年版 第1楽章序奏部、4小節クラリネット出だし部分

第2稿1890年版 第4楽章コーダ最終小節

- ハンス・クナッパーツブッシュ & ミュンヘン・フィル
- セルジュ・チェリビダッケ & ミュンヘン・フィル

## 交響曲4番変ホ長調“ロマンティック” 第3楽章-スケルツォ

第1稿1874年版：第2稿とは全く異なるスケルツォ

- マルクス・ポシュナー & ウィーン放送交響楽団（2021年録音） 開始4分30秒から

第2稿1878年版

- ヘルベルト・ブロムシュテット & ライプツヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団（2010年録音） 開始4分20秒から

## 交響曲4番変ホ長調“ロマンティック” 第3楽章-スケルツォのトリオ部分

第1稿1874年版

- マルクス・ポシュナー & ウィーン放送交響楽団（2021年録音）

第2稿1878年版

- ヘルベルト・ブロムシュテット & ライプツヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団（2010年録音）

## 交響曲第1番ハ短調 第3楽章-スケルツォ主部

第1稿（1865年～1866年）リンツ稿

- ゲオルク・ショルティ & シカゴ交響楽団（1995年録音）

第2稿（1890年～1891年）ウィーン稿

- ギュンター・ヴァント & ケルン放送交響楽団（1981年録音）

●補助の資料として、金子建志氏より提供いただいた資料。

### <チェリビダツケのブルックナー>

チェリビダツケのブルックナーの一般的な特徴を言うなら、「超微速前進によるスケールの巨きさ」ということになるだろう。晩年に手兵ミュンヘン・フィルと遺した全集には、その到達点が示されているが、中でも「8番」はエベレストのように超然と聳えている。

中でも本番を会場で聴いて圧倒されたのがⅣ楽章・183小節～のティンパニー。ミュンヘン・フィルにはチェリを慕って個性的な名手が集まっていたが、ティンパニストのペーター・ザードロは怪物的な天才だった。EMIが死後に纏めたCDだと（7分57秒～）で確認できるが、残念ながらサントリーホールを圧倒した、あの巨人さながらの歩みは再現できていないと思う。こうした個性的な山場を改めて検証してみると、チェリが録音という行為自体を全く軽んじていた理由も納得がゆく。

サントリーホールに於ける来日公演は映像でも確認できるのだが、ザードロはアクセントを付けたい音を、重音で（つまり複数のティンパニーで）叩いているように見える。それがザードロによる「厨房の秘儀」的な隠し味なのか、チェリによる指示なのかは不明だが、限りなく「編曲」に近い行為なのは確かであろう。

より確信犯的なのはⅠ楽章・序奏部、第4小節のクラ（0分17秒～）。第1稿には、この応答音型自体が存在せず、第2稿になって張り譜で追加したことが判る。その修正跡から推量して音程を変えた可能性も確かに考えられなくはないが、チェリによるこの変更自体は、音楽学者的なスタンスよりは、作曲家的なそれが感じられるように思う。

「7番」で最もチェリらしいのは威圧的なトゥティに入ったⅣ楽章96小節の瞬間的なディミヌエンド（3分54秒～）。こうした減衰の指示は自筆譜・印刷譜ともに見られないので、初めて聴くと、かなり驚かされる。これはチェリが時々使う意表を衝いたフェイントで、堂々たるトゥティが断言的に終わる最終音などで、予想外の印象をもたらす。こうした効果は、即興的な「棒による技」では無理。リハーサルで周到に指示を与えた成果であろう。

「7番」のⅠ楽章で言うと、306小節のクラリネット（16分01秒～）で「自筆スコア=原典版」の「7の和音の旋律線」を採らず、より自然に聞こえる改訂版の常識的なⅠの和音の分散和音を採用しているあたりは、自らの感覚を優先する人らしいと感じる。Ⅳ楽章の序奏的な主題提示で、改訂版=ノヴァーク版の緩急の頻繁な交替を避け、ハース版と同じインテンポに徹しているのも同様の美意識に繋がる。Ⅱ楽章の頂点177小節（22分36秒～）では改訂版=ノヴァーク版の打楽器群（シンバル、トライアングル、ティンパニー）を盛大に鳴らす。こうした頂点で、したり顔で「学者的な解釈に逃げない」あたりもチェリらしい。

全く予想外の表現で驚かされたのが「4番・ロマンティック」IV楽章のコーダ。477小節から延々と続く弦の6連符の刻み（2分34秒5）を、「3+3」という意表を衝いたアクセントで執拗に強調したのだ。クレッシェンドするほど、6連符1拍ずつのアクセントが異様な迫力で迫ってきた。スコア上も「3+3」に分かれている提示部・76小節～（2分40秒～）あたりを根拠にしているのかも知れないが、普通の感覚からすれば明らかにデフォルメで、コーダ印象を全く変えてしまっていた。

異様に遅かったり、聴き手に禅問答をしかけたり、といったあたりを特徴するチェリのブルックナーの中で、比較的、穏当な印象を与えるが「3番」。ただし、整理が行き届いたノヴァーク版・第II稿（1888/89年）を使っているせいもあるだろう。もし大改訂+短縮を経る前の第I稿だったら、さぞや破天荒な演奏になっていたに違いない。

そうした事情もあって「3番」は比較的、穏当な解釈だが、IV楽章155小節～（4分36秒～）や185小節～（5分38秒～）のシンコペーション音型は、いかにも現実的な音響を前提に解釈やテンポを決めるチェリらしいと感じる。

パイプオルガンという楽器は、鍵盤を弾いて少し経ってからパイプが鳴る。そのディレイ構造上をそのまま実像化したのが、こうしたエコー的なオーケストレーション。チェリはオルガニスト、ブルックナーならではのこうした音響を理解した上で悠然と振るから、構造が良く判る。

どちらかというとな非凡な個性が刻印されている部分にスポットを当てる形になってしまったが、超微速前進による発見を愉しみながら、深海を覗くように聴き直してみてもいいだろう。

2024年9月 金子建志